

方向

第七六号 一九八七年二月二〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

照 珍 律 師 (一) 赤 谷 明 海

はじめに これは著者赤谷明海氏が一九五六年に執筆した龍谷大学研究科第二期報告論文である。同大文学部事務室を経て月輪賢隆教授に提出されたものと推察されるが、教授はすでに逝去され、文学部にも図書館にも論文は残っていない。幸い草稿が著者の手許に遺存するので、紀美子夫人の許しを得てここに連載する。成立前後の事情は、赤谷氏の自伝ともいふべき『平安学園と私』に、次のように言う。

（京都府綴喜郡八幡町・現在の八幡市の）法園寺に移ってきた（昭和）三〇年四月に、龍大研究科へ復学の手続きを終えていたが、入院などのため初めて授業に出たのは九月の末であった。：私の方向は律宗史、特に日本律宗の教団史や僧伝にしばらくはられていた。従って報告論文も江戸初期の律僧『照珍律師』（草稿四八枚存）であった。提出は当然翌年三月末が期限であるが、六月になって（この頃、平安で講師をしていたが）やっと出すことができた。これで何とか二期生は終わった筈であるが、その後執事辞任問題や平安の専任就職で、研究科を卒えることもなしに終わってしまった。しかし、曲りなりにも研究科生であった一年余りの間は久し振りに学問的な雰囲気をかぐことができた。特にその場所は図書館であり、旧知の小島文保（通正、現龍大短大部教授へ先年逝去された）が出納室にいた頃、氏から教示や便宜を受けるところが多かった。

草稿は、書込みや削除が多く、読みにくいところもあり、誤り無く写せたという自信はないが、取りあえず印刷して、大方の指正を仰ぎたい。

(一九八七年一月二十九日 原田憲雄)

一、 照珍伝について

二、 照珍の学業

三、 照珍の人物について

一、 照珍伝について

照珍の伝記としては、次の三本を数えることができる。

① 戒山撰 律苑僧宝伝 卷十四 招提寺玉英珍律師伝

② 義澄撰 招提千歳伝記 卷上之三 玉英珍和尚伝

③ 師蛮撰 本朝高僧伝 卷六十二 和州招提寺沙門照珍伝

右は何れも元禄年間に相継いで世に出たものであるが、『本朝高僧伝』の記事は前二本を踏襲したにすぎず、残り二本の中、『僧宝伝』の分は要領を簡潔に述べている点で優れ、『千歳伝』の記事は、多くの資料によって前者の欠を補っている点で勝っている。

今、この二本を照合しながら、照珍伝の検討を行ってみたい。

〔名称〕 先ず、名字について『僧宝伝』（以下『伝』と略す）は、

「律師諱照珍。字宝園。玉英其号也。」

と記し、『千歳伝記』（以下『記』と略す）には

「和尚諱照珍。玉英其字也。自号宝園。又称光照。」

とあって、字と号が顛倒している。今いざれと決め難い。ただ『記』に示す光照の称については、写本の奥書に光照を後照珍に改めた旨を自ら記している。手許にある資料では三十二才ではまだ光照とあり、三十九才の時は既に照珍と称している。

〔出生〕 次に本貫については、二本共に河州津田氏と記している。『坊目拙解』には飯田三郎兵衛直宗の子とあるが、これは誤りで、法金剛院に現存する木造照珍像の底に、自筆で、

「生国河州津田備後守息男也」

と書かれている。津田備後守については明らかでないが、太田氏『姓氏家系大辞典』によれば、河州交野郡津田の城主が津田氏と称しているので、いざれその一族であろう。又太田氏は津田氏が後に織田信長に亡ぼされた事を云っており、もしそれが正しいとすれば、照珍の師事した泉装も織田氏に敗死した今川義元の実弟であるのは一つの縁でもあろう。

この津田の地は、現在の牧方市津田町に当り、照珍の入寺した八幡庄とは約二里を距てる所である。生時については没年より逆算して後奈良天皇の天文二十四年（弘治元年）であることが明らかであるが、月日は判らない。

〔入寺〕 入寺得度に關しては、『伝』に

「礼寿徳院照瑜公爲師。」

とあるだけで、没年のところには「僧臘未詳」とことわっている。『記』の作者も之には触れていない。唐招提寺には自筆の『八幡寿徳院光照記』なるものが一冊伝わっているとの事、未だ実見に及ばないが、表題から推して、寿徳院時代の照珍の雜記とも思われ、これによつて入寺、得度の経過を明らかにし得るかもしれない。しかし目下のところ、永祿年間八幡寿徳院に入り、恐らく照瑜公によつて剃髪したであろう位の表現しか出来ない。恐らくというのは或は照海によつたかもしれないからである。

〔受戒〕 先ず通受について、『伝』には「既而受滿分戒。」と年時を記していないが、『記』には、「元龜三年。依通受法納滿分戒。」とある。今照珍が戒臘を書き留めたもの数件を見ることが出来、順に三例を採り上げてみれば次の通りである。

- ① 天正四年仲冬下旬 夏五 年廿二 『南山教觀名目』奥書
- ② 天正八年八月 通八 別一 『寿徳院光照記』奥書
- ③ 天正十三年六月 通十三 年三十一 『作法集口決』奥書

右の中第二例は別受戒臘から照らしてへ註〕正規の數え方による夏數であることが明らかであるから、通八とは元龜三年の結夏までに受戒していることを示すものである。すれば第一例の天正四年は自恣得歲後の仲冬であるから五夏で正しく、第三例は安居中の六月であるから通十三でこれも正しい。老後の戒臘についても計算の誤

りはなく、『記』にある通り元龜三年、そしてその春頃に進具していることとなる、年十八才であった。

〈註〉別受は後述の如く天正七年十月であるから天正八年八月は一夏となる。

別受については『記』に、

天正七年登招提壇。自泉装宗師伝別受法。〈以下引文におおむね「」を付けない〉

とある如く、唐招提寺大徳泉装律師を和上とし、西大寺、戒壇院等の律僧を請じての十人受による受戒であったことは、同時の受者である光島戒牒によつて知ることが出来る。十月二十七日の事である。ところが面白いことには、その前日の二十六日には泉装が招提戒壇に於いて西大寺の高範から別受を受けている〈註〉。

〈註〉『唐招提寺別受戒式』所収泉装戒牒。

前述の如く泉装は名門今川家の出身であり、既に泉涌寺長老として名声の高い人物である。彼が昨日は受者として証明師に仰いだ人々を、今日は下に引具して和上の席に上る点に、当時の「時代」を窺うことが出来よう。ともあれ、彼によるこの別受は、泉涌、西大、東大、招提の南北二律四箇律場の交流であり、画期的な行事と云わねばならない。これ以後、泉山招山の交渉は深まり、兎角対立的な西大招提の關係も、泉装のあとを継いで招提長老となった凝海が西大寺長老をも兼ねるといふ事態を招くのである。この南北合同の記念すべき受戒会に受者として加わつた照珍は年二十五才であった。尚彼が菩薩戒を受けたことについて『法金剛院建立願文』に「余照珍勵微志寸心紹隆此精舍再耀法金剛院之光輝發受菩薩大乘戒自他願登上品之紫蓮」とあるのは、本堂建立に際して新に菩薩戒を受けたことを示すようで、すれば元和三年の頃恐らく自誓受によつて発受したものと考ええる。

孤山雁信

赤谷明海書翰集

(二〇)

原田憲雄編

へ赤谷君の平安学園での同僚で、現在三重県尾鷲市在住の安藤智純氏が、氏宛の赤谷君の書翰一四通を、赤谷紀美子夫人を通じてお貸しくくださったので、ここに掲載し、氏に感謝します。なお、他にも赤谷君の書翰をご保存の方があって、同様お貸しねがえれば幸甚です。編者

★1966.8.5. 安藤智純氏宛。葉書。宛先、三重県尾鷲市中央町光円寺。差出住所、宇治市伊勢田町中山七三。

ものずきな男のつきあいをしたばかりに今頃は身体の節々が痛み、けだるさをもて余しておられることかと想像しています。小生もいささかげんなりしています。それにしても今度の行では、いろいろと御迷惑をおかけしました、大変な御歓待に与り、いやはや恐縮千万、有難く御礼申しあげます。お蔭で智純坊やの背景がはっきりと印象づけられ、家庭訪問の必要性を再認識しましたような次第。昨日松坂でぼやぼやしている間に特急券が売切れ、やはりお供がいないと不便です。急行で八木まで立ちずめ、それでも七時すぎには帰宅しました。只今午前八時、矢ノ川峠の雨霧を想い、光円寺の真紅の唐桐を想い浮べています。御両親へのお取りつき、よろしくお願いたします。八月五日

★1971.10.8. 同宛。葉書。宛先、京都市下京区大宮七条平安高等学校。差出住所、橿原市四条町奈良県立医大付属病院。

『馬車よ、ゆっくりり走れ』と云われるままに、病馬は尚更ゆっくりり歩いていたので、まだ全文を読み切るに至っていません。しかし画家ならではの自然に対する鋭い目と、的確、簡潔な表現力とに感じ入りました。時に何気

なく人間の生き方が挿入されているのも、詩や民話を織り込んであるのも、平板さを救っています。さて胃透視の結果は良好、来る十三日で一クール分の注射が終了しますので退院も間近か、不本意ながら尊顔を拝する期も迫ってきたようです。

★1972.12.24. 同宛。葉書。墨書。宛先、尾鷲市光円寺。差出住所、宇治市伊勢田町。

芳書拝受且又松魚到来千万恭く奉存候

本廿二日漸く成績の事ム片付き明日職員会議 月曜に近大への出張を終れば本年の仕事終了と相成る筈に御座候
余白無きためあととは面談にて。

★1973.7.29. 同宛。手紙。

昨日、お便りと共に名産の饅節到来いたしました。有難く頂戴いたします。

病状の方、早急に恢復する見込みがないとの事ですが、どんなことで好くなる転機が来るとも限らず、辛抱強く御養生の程願ひあげます。

台風六号の余波で、尾鷲の方は雨があったことと想いますが、当地は測候所開設以来の旱天続きとか、連日水やりに追われています。そのうち、水飢饉で撒水まかりならぬということになるかもしれません。炎天に時を得たのは三鉢の蓮、紅白とりませて伊勢田の生仏を荘厳しています。

この生仏、今年はいじめぐりとみえて、補習は四限目で、相棒がなく、隣近所に遠慮なく大音声を響かせることができました。長広舌相に接し得た生徒達は果報者です。父兄との懇談も企画したので 毎日早朝から夕方ま

で学校に腰を据え、一昨二十七日で禪定から立ちあがりました。

昨日、京商との野球戦に西京極まで出向きましたが、残念というよりは予想通り敗れました。それでも意外と善戦したのがせめてものなぐさめとなりました。

明後三十一日より東京へ出、八月三日に帰ってきます。病院行きではなく、文化史教授に時代背景をどうとり扱うかとのテーマの研究会に出席するため。見学の深大寺に期待を寄せています。

宇治茶（註曰、宇治店舗販売之茶也）少々お送りしました。親子差向いで歓談される席におめもじ出来ましたらとの味のある計らいでございます。御免。七月二十九日 赤谷生 安藤智純様

★1973.9.5. 同宛。手紙。

九月に入り、さすがに猛暑も後退し、今日など、雨のせいもあってヒヤリとしています。

授業に入って三日、まだ軌道に乗りませんが、早く乗れるよう自分に云い聞かせています。それでも勤めが始まるととたんに食欲がなくなり、職場ノイローゼかと前途を思い暗い気持です。

本日帰宅して貴翰拝見。病状は変わらず、胃まで悪くした由、焦燥の程お察しいたします。胃の方は恐らく焦燥から来る神経性潰瘍ではないでしょうか。いくらあせってもなるようにしかならないもの、ええい、どうなとなれと居直るズブトさが望まれます。

小生も右腰から大腿部にかけての痛みの上、ひざの関節から足のうらに及ぶしびれが次第にひどくなり、夏季補習にはコルセットをはめて出勤しましたが暑さに辛抱ならず、これは涼しくなつてからと放棄し、その代り、

何か効験でもと灸を試みました。近所に「二日やいと」があり、そこで三日続けて不動明王よろしく、二十三ヶ所から煙を立てました。結果はさんざん。痛みもしびれも変わりなく、やいとのとあとが化膿して熱をもつ始末、まだもとに戻っていません。それで目下のところ勝手にしやがれと八方破れの身構え、いや心構えに住しているところです。まあ何とかなるでしょう。

貴兄の場合、小生などと比較にならぬ苦痛かと思いますが、人間の出来が小生とは比較にならぬ程高マイにあらせられる事とて、病気に処する一大工夫があるものと期待しています。胃潰瘍など下凡な人間の真似をしてはいけません。

ところで月余に亘る休暇中、百人余りの世帯ともなると、いろいろ事がおこるもので、東君が胃の手術で入院野依君も入院、空本先生は孫の相手をしていてコケて腰が立たず、浦野さんはまた追突されて曾打症、いやはやいろいろのことがおこるものです。藤谷君は出てきましたが、本条、田辺昭の両氏はまだ療養中。

東京では深大寺の釈迦倚像をじっくり拝観してきましたが、想像していた以上に小さく、顔が軀部に比して特に小さく、足の部分の作りが甚だ弱いのが印象に残っています。武蔵国分寺、東村山市の正福寺、埼玉県の平林寺も見てきました。平林寺は松平信綱の菩提寺、広大な境内に武蔵野の林藪をとりこみ、堂宇は整然と覺を並べてなかなかの巨刹です。時間が余って東京博物館で半日、ゆっくりと見学を楽しみましたが、館の近くに因州池田藩邸の表門が移されているのに初めて気付きました。それまで大名屋敷の門を本願寺の台所門を基準にして想像していましたが、その堅固さと大きさは比較になりません。こんなものが続いていた千代田城附近のブキミさ

は想像がつきかねます。

今日はこのくらいにしておきます。天理へ来られたら又お目にかかれるものとお待ちしています。九月五日夜
★1975.11.25. 同宛。葉書。墨書。

先般久々に御上洛のところ 小生身体の不調と繁忙のため ゆるゆると御話も承れず 失礼いたしました 送別の一席も設けるべきところ これも欠礼いたしました この件については 後日を期し取敢御詫言上まで まだ風邪がぬけきりません

★1976.8.27. 同宛。葉書。

二、三日来急に涼しくなってきました。涼しさと共にいよいよまた学校かの思いがつのってきて露陶しいことです。その後お身体の方は如何ですか、寺での生活が身についてきましたか、この十月には平安の百周年記念式があり、それに向けて中学校舎の改築工事が進捗中です。旧校舎ただ一つの遺構、あの小さな門衛所を残すことになっていたのですが、このところそれも叶わぬ雲行きとなってきました。目下百年史に附ける年表づくりをやっています。ネタ不足で新学期に入ってまだ倉さがしというところです。かつをぶし頂戴しました。有難うございます。

★1976.11.28. 同宛。手紙。

南向きの部屋の中には暖かい陽がさし込んでいますが、棕櫚竹の鉢が軒下で倒れています。それ程の強い風が吹いています。その後、体調は如何ですか、新しい暮らし方への順応振りは如何ですか。御両親の御健勝ぶりはお

変わりないことと想像しています。

先般御来校されたのが十月一日、一緒に食事でもと思ひながら躊躇したままでお別れしましたが、此方の調子も芳しくなかつたのでしよう。あれから一週間たつたたぬかに欠勤を申し出であちこちで検査の末、結局胃潰瘍の再発と診断されました。四、五年前、八木へ入院した当時程大きなものではないのですが、その痕跡に近い部位にまたできたそうです。患部の組織をつまみとられての検査の結果は良性とのことで切除手術を受けなくてすむことになつたので安心はしていますが、自覚の上ではなかなか快方に向かわず、うっとうしい毎日を過ごしています。退職の時期をすぐあとにひかえながら、終りを全う出来ないでぶらぶらしているのが一番残念です。自愛しすぎるほど気をつけてきた積りですが、どこかに油断があつたのでしよう。

入院には及ばぬということで毎日八木へ注射に通っていますが付属病院の通弊か、ろくでもない医者卵が沢山居て注射がまともにできず、〃他の者にかわってくれ〃と要求したこともあり。一人前の者になるむずかしさ、どこでも同じだが中途半端な教師の感想でした。

天気の良い日は病院帰りに違った道をあちこち歩いていますが、旧八木の町の中心の街道は飛鳥と奈良を結ぶ古い街道らしく、近くの今井町に劣らぬ古い商家が沢山残っています。中街道と土地の人は云っていますが古代の中つ道に当るかどうか調べていません。嘗て天香具山の頂上まで登ったことがあるので、耳無山へ登る道の有無を知りたいと麓まで行ったところ、明治天皇が大和上演習の節登山道を新設したそうで、今も残っていることを知りました。目下の身体では無理ですが、そのうちに登ってそこから三輪山を眺めるのを楽しみにしています。

毎日の車中、つれづれのままに『好色一代男』の中に出てくる神仏関係の名辭を全部マークしました。およそ西鶴の宗教觀を窺うには無縁の著作のようですが、何となく纏めてみたくなって手がけたものです。好色的な素材として取り上げた宗教関係の事項や、世情、習俗、故事、地名、人名等々、軽く点景的描写に用いられた宗教的名辭が殆どですが、中には殊勝な用例もなく、僅かなその種のものから彼の信條を次の如くみてとりました。

煩惱の逃れがたきは人の世のならない。苦しみ悩みからぬけようとしてもそれは前世からの約束事でどうにもならぬ、宿世の業である。しかもこれは仏が己れに課したもうたものであるから、これを素直に受け、その苦しみに耐えることこそが仏道である。その苦からの一時的な安易な救済（逃避）を考えて他人に苦を転嫁してはならぬ。要は悪心をおこさず、忍苦を甘受する生活こそが仏の道に叶い、そこから自然に平安への道も開かれてくる。というもの。忍苦の菩薩行を重視して、悪心をおこすことを極度に戒めています。業感縁起、三世因果、勸善懲惡等仏教的用語の類型のどれに充てるかは知らず、とにかく前記のように西鶴の宗教的側面を受け取りました。ところで、この種になった文章の終りを

「悪行は悔ゆるをうべし。悪心は悔ゆるをうべからじ」（世之介三十四才の段）

のことわざよの言句で締めくくっています。これと同じ句（但し悪行は悪業となっている）が『武家義理物語』巻の五、第四段の話の中にも出ていますので、彼の処世訓とした戒語であろうかと想像しています。…追記「悪行は」云々をどう訳したらよいか教えて下さい

但し、小生が読んだ本は平凡社の『世界名作全集』中のもので、丹羽文雄の訳本ですから 原作に当らねば話になりません。

お茶の時節に入りましたので 当地の店から発送を依頼しておきました。うまくなければ入れ方を研究して下さい。妄言多謝。 十一月二十八日(日) 赤谷生 安藤智純様まいる

ヤ シ ヤ ブ シ 探 訪

1987.12.7.

原 田 慶

カ ッ ト 原田道子

「吉崎御坊へも立ち寄り、鴨観察館などにも今回は行って来ました。同封のハンカチは嵯美術館においてありましたもの、あなたのお土産に求めました。加佐ノ岬からの眺めはみな灰色でしたが、海と波と空とうっすら遠くに見える能登半島も、少しずつ違う灰色で、今も目に浮かびます。海岸の崖の上は木が茂り、木の下の笹などは冬枯れしていて、サルトリイバラの実の赤いのやムラサキシキブの実などが、うす暗い林の中に見えました。嵯美術館のティールームには、前回は風知草が目につきましたが、今回は山らつきょうの花咲いている鉢が置いてありました。」

という手紙に草木染のハンカチを一枚同封して、福井にいる友達が送ってくれた。

ハンカチは、金色のような黄茶に染められていて、小さな和紙に「草木染、ヤシヤブシ」と書いてある。それは透きとおるように薄くてやわらかく、光沢があつて絹のようでもあり、木綿のようでもある。草木染といえ

私もずっと以前に型染を習ったことがあった。まだ岡崎に京都伝統産業会館のできるまえで、現在はそこで行なわれているが、その時には向かい側にある、平安神宮のすぐ近くの京都會館別館というところで講習が行われた。河辺篤という方が指導され、その時使った染料はヤマモモの樹皮を煮出した液で、硫酸銅を媒染剤に使って金茶に染めた。染め物というのは何とも不思議に魅力のある仕事である。もっと習いたいと思っていたら、その講習が終わって、ほんとうに間もなく、河辺先生は亡くなられた。七十才くらいの方だったように思う。その時に買っただけの型紙用の洗紙などは丸めて置いたままになっている。

私はヤシャブシで染められたハンカチを何度も取り出して眺めていた。ヤシャブシとはどんな木だったのだろうか。以前に、何かの本でヤシャブシについて書いてあるのを読んだことがある。「ヤシャブシは夜叉ブシではない。」ということが書いてあった。

ヤシャブシは「夜叉五倍子」とか「矢車附子」などと書くカバノキ科の落葉高木である。よく似た木に、ハンノキ、ヤマハンノキ、オオバヤシャブシなどがあるが、どの木も果実、樹皮、葉などを染料に用いる。古くは黒を染めるのに使われたようであるが、鉄や、アルカリなど媒染剤を使い分けることによって黄茶、赤茶、濃茶などが染められるということである。

「ヤシャブシは夜叉ブシではない」というのは、中村浩著『植物名の由来』に書かれていることで、ふつう、夜叉とは果実の表面がでこぼこしているのと言われるとされるが、そうではなくて、ヤシャは「八塩」、または「八入」のことで、八回も染液に浸すこと、つまり濃く染めることであり、ブシは漢字で「五倍子」と書く、お

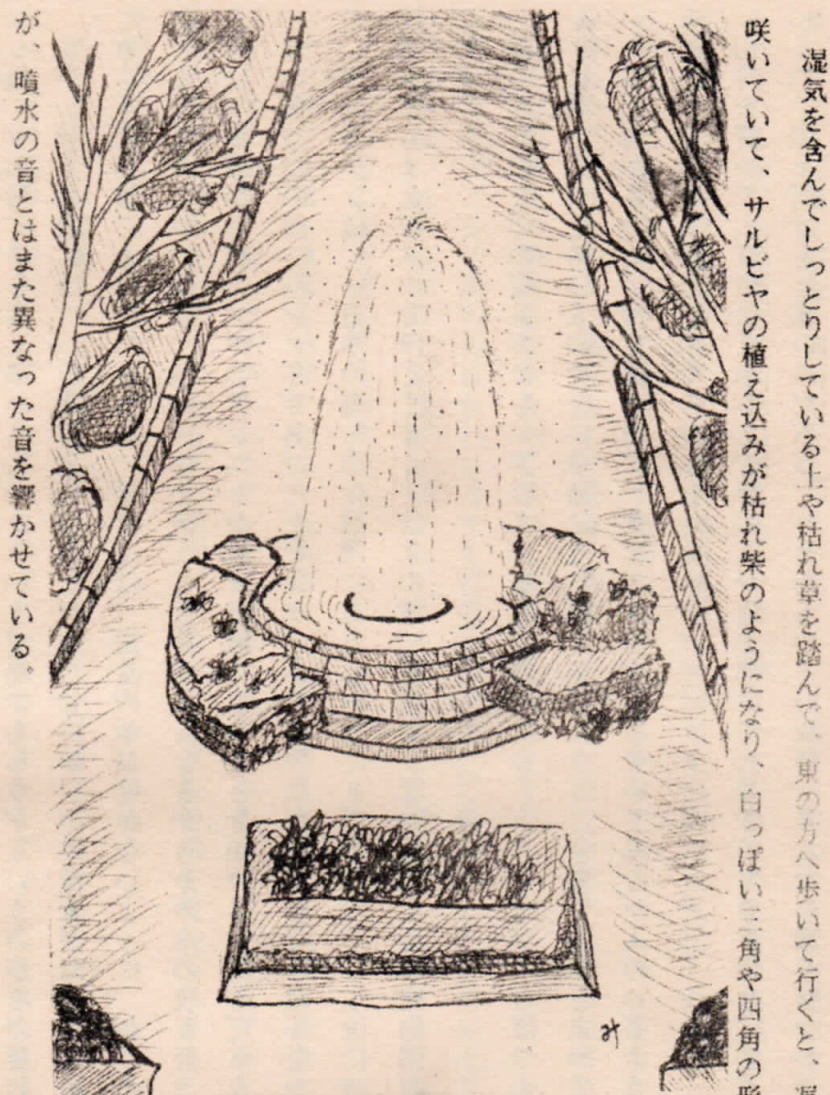
はぐろを染めるのに使ったタンニンのフシと同じことで、果実がタンニンを多く含んでいるからである。ヤシャブシは、ルおはぐろをよく染めるものルという意味であろう、というのがその要約である。

私が小学生の頃には、農薬などを使わなかったせい、山に松茸がたくさん出た。その季節には、母についてきょうだい皆でよく山へ行った。帰りには、松茸の傘が乾かないように、かごの上にシダや木の枝を折ってかぶせるのだったが、母は、ハンノキを使うと松茸が黒くなるからその木の枝を折ってはいけなかった。村の人達は、経験からハンノキのタンニンが松茸を黒くすることを知っていたのだろう。

母の言ったのが、ハンノキであったかヤシャブシであったか確かめてみたくなって、私は植物園に電話をかけた。ヤシャブシは、「日本の森」の生態園にあるということだったので、午後時間を潰って出かけた。バスに乗ってしまえば三十分ほどで着く。洛北の地、賀茂川を渡ったところの植物園前で、バスを降りたのは私だけだった。

園の入り口までの桜並木にも、歩いている人は誰もなく、タクシーが一台ぼつんと止まっていた。以前、タクシーに乗って来た時に人の少ない季節には、眠くなったらここに来て、車を止めて休むのに都合がよいと言っていた運転者があった。傍を通る時に、タクシーの中をのぞいてみたが人のいるようには見えなかったから、何かを被ってぐっすり眠っていたのかもしれない。

切符を買って入り口にまわると、男の人が窓を開けて大急ぎで半券を切り、すぐに窓を閉めた。中は暖房しているの窓を開けると寒いのだろう、外をあるいていけば、そんなに寒くはなかった。



が、噴水の音とはまた異なった音を響かせている。

あまりの静かさに、とまどっていると、砂を踏む音がして、白いはんてんに白い前掛、白い帽子をかぶり下駄

湿気を含んでしっとりしている上や枯れ草を踏んで、東の方へ歩いて行くと、遅すぎたバラがところどころに咲いていて、サルビヤの植え込みが枯れ柴のようになり、白っぽい三角や四角の形を見せている。どんな色の花が咲いていたのかはもうわからないが、私は少しその種子を手に集めてにぎりしめた。誰もいない植物園は静まりかえって、噴水が思いきりたくさんの水を吹き上げている。そのまわりに、ピラカンサの赤や黄色の実が、ひとときわ美しく、降ってくる霧のようなしぶきに濡れていた。植え込みの下から段になって流れ落ちるように引かれた、滝の水

をはいた料理人ふうの男の人が、手に大きなまつぼっくりを三つつかんで現れ、私の来た方向へ歩いて行った。一瞬、現実には引きもどされた時間は、すぐまた、過去を再現しているような、不思議な静けさにもどった。

そこを通り抜けて、一ばん東側の雑木の林に添って歩いて行くと、すぐ外側は府立大学の畜舎になっていくらしくて、いつもこの辺りでは、そのにおいと牛や山羊の鳴き声がする。ここで私より少し年若いほどの女の人が一人歩いてくるのに出あった。ちよつと会釈してすれ違ふと、もうどこまで行っても誰もいない。菊の鉢が並べられていたらしい跡がついている芝草の後方に、何かわからない赤い実が光っている。その近くのヒイラギのよな葉をした木の一枝にまっ白な花が吹き出すように咲いていた。

北東の隅まで来ると明るくなって、すっかり落葉しつくした木々が並んでいる。町の中とちがって、思ったよりずっと冬が進んでいるようである。そこから西へ向かって、「日本の森」の生態園の近くで、植物園の人らしい、長靴をはいた作業着姿の人に出会った。たずねてみると、ヤシャブシはこの生態園の中にあるはずだが担当ではないのはつきりわからないという。

東側から入ったので常緑樹から始まり、地方別にだんだん西方向へ寒い地方の植物が植えられている。すっかり落葉した木々が、名札をつけて立っているが、葉も花もないので見分けがつかない。それでも名札は邪魔なものがないのでよく見える。草などはほとんど枯れてしまつて何も無い所に、名札ばかりが一面に並んでいるのがおもしろい。

ヤシャブシも実くらいは残しているのかと思つたがどの木も葉一枚つけずにきれいさっぱりからっぽだった。

ナナカマドと書いた札をつけた木も赤い実の一粒も残していない。とにかく木の姿だけでも見たいと思って、往ったりもどったり三度ほど歩いたが、ついにヤシャブシには出会わなかった。カラスがたくさんいて、私が近づくとバサバサと音をたてて飛び上がり、遠くへ行ってカアカアと鳴いている。中には平気で枯葉の上を歩いていゝるものもあるが、まっ黒の鳥はあまり可愛くない。こんなにつきり木の実も残っていないのはカラスのいたずらかもしれない。

一時間ほど歩きまわって、結局ヤシャブシを見つけることはできず、芝生の広場の傍の茂みでサンシユのまっ赤に熟した実を五粒ほど取ってハンカチに包んだ。楓の紅葉をひろってから、事務所へ寄ってみると、広い室内には三人しか人がいなかった。ちょっと驚いたような顔をしながら、ドアの一番近くにいた人が、水曜日に樹木相談をしているからその時に来るようにと教えてくれた。

私のヤシャブシ探訪は失敗に終わったけれど、この季節だから仕方ないことだと思ふ。園内を歩いているうちに、はつきりと思ひ出したのは、安土山の麓で見かけた、異常に実の大きいハンノキのことである。あの木がヤシャブシだったとすると、母の言ったのは確かにハンノキである。あの松茸山も十年以上も前に県に買収されて、医大や美術館などが建ち、ニュータウンが山を越えて村へ開けつつある。それでもまだかろうじて山の姿を保っているところには、ひょっこりと松茸が頭を持ち上げているのではないだろうか。

まだ四時にはならないのに空気が冷めたくなってきた。植物園の門を出ると、桜並木には、先に止まっていたタクシーはなく、ちがうタクシーが一台止まっていたが、私が傍を通り過ぎると、その車は空のまままで、私を追

い越して帰って行った。園内にはまだ老夫婦や子ども連れの若い母親が見えたのだががなあと思ひながら、私は後から見送った。並木と金網で隔てられた府立大学の広いグラウンドにも人影はなく、往く時には遠くのベンチの傍に立って、毛布をボンチョのように肩からかけ、トランペットを吹いていた学生の姿ももう見えない。
洛北の日暮れは少し早いようである。

※第七四号正誤 二頁二行 第二の無色界↓第二の色界 二行 無色天↓無色界 (上原淳道氏示教 多謝)

知日 慧思 通 法華経巡礼 8 1987.12.18. 原田憲雄

シャーリプトラは、ラージヤグリハに近いナーラカ村のバラモンで、名はウパティスヤだが、母ルーバシャリーが賢夫人として知られたので、シャーリーの息子(シャーリプトラ)と呼ばれた。漢訳では舍利弗と音写することが多い。近村コーリタのバラモンのマハーマウドガリヤーヤナも、名はコーリタだが、母マウドガリーの息子の意であり、マハー(大)は、マハーカーシャバのと同様、美称である。漢訳では摩訶目犍(乾)連、略して目連といひならわす。ふたりは少年時代から親友で、近郊の山での祭りに見に行き、集まった多くの人々もやがては死ぬことを思い無常を感じ、共に出家し、サンジャヤという思想家の弟子になり、まもなく二五〇人の弟子の上首になったが、サンジャヤの教えでは苦悩を脱することはできないと感じ、先に道を得たら教えることに

しようと、二人で誓いあった。ある朝シャーリプトラがラージャグリハの街で托鉢している仏弟子のアシュヴァジットに出会った。姿形がうやうやしく行動がもの静かだ。これはいったいどういう人だろうと心うたれ、そつとついて行き、托鉢の終わったとき声をかけた。「あなたの姿はたいへん清らかですが、誰の契めで出家し、誰を師とし、どのような教えを学んでおられるのですか」「シャカ族出身の沙門釈尊に依って出家し、釈尊を師とし、釈尊の教えを楽しんでいます」「あなたの師はどのような教えを説いておられるのですか」「わたしは出家して間もないので、うまく説明できないのです」「ともかくどんな内容か、いつてくください」「諸法は因より生じる。如来はその因を説かれる。諸法の滅をもまた、大沙門はこのように説かれます」これを聞いてシャーリプトラは法の眼を開いた、という。シャーリプトラはマウドガリヤーヤナをアシュヴァジットに紹介し、シャーリプトラとマウドガリヤーヤナの二人はサンジャヤの二五〇人の弟子を引き連れて釈尊の弟子となった。それでサンジャヤは口から熱血を吐いた。またマガダの人々は次のようにいつて釈尊をそしった。「沙門ゴータマが来て子を奪う。沙門ゴータマが来て夫を奪う。沙門ゴータマが来て家を断絶させる。今あのひとは一〇〇〇人の結髪バラモンを出家させた。サンジャヤの二五〇人のバラモン達を出家させた」この非難は間もなく消えたようだがそれで問題が無くなったわけではない。「仏本行集経」(大正・三)等によれば、アシュヴァジットに連れられて来る二人を遠くから見て、釈尊は、シャーリプトラを「智慧第一」、マウドガリヤーヤナを「神通第一」と見抜き弟子の上座に置いたので、古い弟子達の間に不平がおこったが、釈尊は、これは二人の前生の志願による、といつてなだめたという。また「チャートクマ・スッタ Tantra」(南伝・一〇)は次のような話を伝える。

あるとき世尊がチャートゥマー聚落におられた。シャーリプトラとマウドガリヤーヤナを首とする五〇〇人のビク達が世尊に会うためやってきた。やって来たビクともとからいるビク達が挨拶を交し、大きな声で話し合っていた。釈尊が侍者のアーナンダを呼び「漁師が魚を獲る時のように騒いでいるのはどうしたのかね」「シャーリプトラとマウドガリヤーヤナが連れてきたビク達が、もとからいるビク達としゃべっているのです」釈尊はビク達を呼び、事情を聞き、アーナンダのいう通りであることを確かめ、ビク達にいった「きみ達は行きなさい。わたしのもとにいないがいい」ビク達は「かしこまりました」といって立ち去った。

たまたまチャートゥマー聚落の会議所にいたシャカ族の人達が、ビク達を見て、どこへゆかれるのかと聞き、世尊から「立ち去れ」と命ぜられたとのことで、「それならここで暫く待っていてください。世尊のお気持ちをなだめられるかもしれませんから」

シャカ族の人達は世尊を訪ねていった「世尊よ、先にビク達を受け入れてくださったように、今もまた、ビク達をお受けいれください。新入りのビクは出家して日が浅いので、ここでもし世尊に受けいれられなかったら、異心・変心が起こりましょう、若い種子が水を得なければ発育に異変があるように、子牛が母に会えなければ異心・変心が起こるようになります。どうぞあのビク達をお受けいれください」

シャカ族の人達の言葉に釈尊のころはやわらげられた。そこでマウドガリヤーヤナは待っていたビク達を釈尊の許に連れて行った。

釈尊がシャーリプトラにいう「わたしがビク達を去らせたとき、きみはどう思ったかね」「世尊はいま心静か

に寂滅の楽しみのうちにいようとお考えなのだろう。わたしもそうしよう、と思いました。」「お待ち、ちょっとお待ち。シャーリプトラよ、またそんな気持ちになつてはいけませんよ」。次にマウドガリヤーヤナに「わたしがビク達を去らせた時、きみはどう思ったかね」。世尊は心静かに寂滅を楽しんでおられるのだろう。今こそわたしとシャーリプトラはビク達を守らなければならぬ、と思ひました。「そうだそうだ、ほんとにわたしなり、シャーリプトラとマウドガリヤーヤナがビク達を守らなければならないのだ」。こういつて後、ビク達に学習を捨てて還俗することに対する戒めを説いた。

釈尊の出家は、無常に感じ真理を体得するのが主眼ではあつたが、在俗の生活の煩わしさを厭つてのことでもあつたろう。成道後も、その境地の清澄と孤独の楽しさをしばしば讃えたことが經典に散説される。おのれの覺つた理法を説き出すまでも深いためらいがあり、梵天の三度の勸請によつてやつと決心したとの伝説がある。歴史上の人なる釈尊は、伝道の喜びより孤独の寂靜を愛する傾向をもつたことを、この伝説は示唆している。チャートゥマーでのビク追放もその性向の発露だったのであり、慈悲心から伝道を決意し、実行に移つても、事あるごとにその煩わしさにはほとほと愛憎のつきる思いをしていたのではないだろうか。釈尊のその性向を敏感に察知・尊重したシャーリプトラなればこそ、ビク追放を止めようとしなかつたのに違いない。智慧の人シャーリプトラには智慧の人釈尊と似た傾向があり、やはり寂靜を愛するところが深かつたのでもあろう。では釈尊に問われてビクを守ると答えたマウドガリヤーヤナが先にはなぜシャーリプトラと共にビク追放を見すごしたのか。おそらく彼は友シャーリプトラを敬愛するあまり、友の智慧を信じ、友の見過ごすのは自分の思うより深い意味

があつたのことに、友にならつたのであろう。シヤカ族の人達の言葉は、俗世における家あるいは共同社会での愛情の論理であつて、インドの当時の出家者の論理とは同じではなかつたのであろう。しかしその愛情の論理の内に、慈悲行の方法が示されていることを思い、おのれの性向に随うことによつて危うく慈悲の実践にそむきかけたことを、積尊は反省したのではなからうか。

チャートクマー聚落でのこの逸話は、南伝だけではなく、北伝の『増壹阿含経』(大正・二二)にも相当する記事があり、相補つて、歴史的な事実に近いのではなからうか。

智慧は、理智ではなく、理智を含んでそれを超えるものである。シャーリプトラは、決して冷たい理知的な人ではなかつた。『ダーナンジャーニ・スッタ』(南伝・一一)によれば、彼はダーナンジャーニというバラモンを教化し、その臨終に招かれ法を説いたが、バラモンは梵天界に愛着するものだと考え、死後梵天と共住する道を説いた。歸つて積尊に報告し、『シャーリプトラはダーナンジャーニのために更に教えるべきことがあつたのにそれをしなかつたので、かれは死んで梵天界に生まれ変わってしまった』とたしなめられている。あまりにも相手の心情を汲みすぎて、かえつて大きな道において過つのが、この人のかすかな欠点であつた。

師の積尊から『もろもろの比丘よ、シャーリプトラとマウドガリヤーヤナに近づき、習いなさい。すぐれて善良な比丘であり、もろもろの修行者の指導者だ。シャーリプトラは生みの母親のようであり、マウドガリヤーヤナは養母のようなものだ』と讃えられ、その兄弟弟子のマウドガリヤーヤナから

智慧と戒と寂靜とにより彼の岸に達した比丘、かれシャーリプトラこそ最上の人。

と歌われ、ヴァンギーサから、

深い智慧もつ智者であり、道と非道とを熟知する大智のシャーリプトラは、ビクのために法を説く。と歌われるほど、敬慕された。

マウドガリヤーヤナは、人並みすぐれた洞察力によって、時には人に懼れられるほどであったが、シャーリプトラに対する情愛は深く、影の形にそうように、つねにともに釈尊を助けた。しかしふたりとも師の入滅の前に相次いで亡くなった。ことにマウドガリヤーヤナは武装したバラモン（あるいはバラモン思想家に雇われた殺し屋）の手にかかって殺されるという法難だった。師釈尊の悲しみは深かったであろう。シャーリプトラは孔子に与っての顔淵のようであり、マウドガリヤーヤナは子路のごとくであった。そういえば『論語』「先進」の一節を連想させる美しい話もあるが、次回に紹介することにしよう。

※一九八七年一〇月一日、竹内不成氏が急逝された。交通事故とは聞いたが、詳しい事情もわからず、氏が平生俳句をたしなむ人なので、「露白き浄土に君や往きにけん」なる拙句を悼辞に代えた。

一九三六年、龍谷大学予科入学以来の友だが、氏は大男で、わたしは小柄であり、氏はぬうぼうとしており、わたしは内気な方であったから、初めは会釈を交す程度だったが、赤谷明海、柴野純孝両氏を間において親しく交際するようになった。赤谷氏の死後『方向』のよい読者だった。柴野氏、また共通の友である東森善城、高木大抵、河北一道等の諸氏からの便りに接するにつけ、老いて友をうしなう悲しみは痛切である。1987.12.20.